

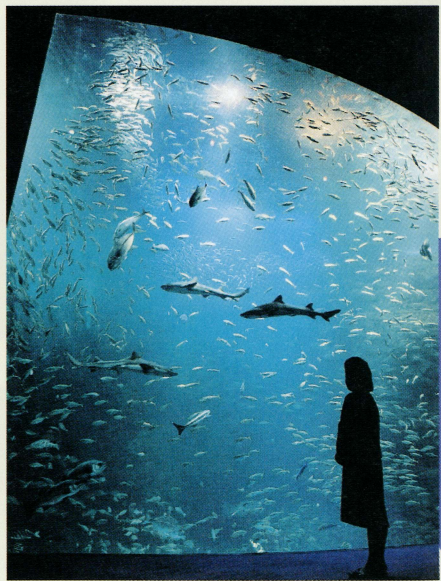
学びながら 楽しもう

新江ノ島水族館 堀由紀子館長に聞く



「生き物にはさまざまな生き方があり、その違いを理解することが大切」と話す堀由紀子館長

(写真提供・神奈川新聞社)



高さ9メートル、水深6.5メートル、底面積144平方メートル、容量1000トンで、厚さ41センチの亚克力ガラスを使用しているという「相模湾大水槽」

江の島水族館50年の歩み

- 1954 (昭和29)年7月 江の島水族館営業開始
- 1956 (昭和31)年1月 昭和天皇が初めてご来館
- 1957 (昭和32)年5月 江の島マリナランド営業開始
- 1964 (昭和39)年5月 江の島海獣動物園開設
- 1986 (昭和61)年1月 世界初のクラゲ展示館開設
- 1988 (昭和63)年8月 日本初のバンドウイルカ繁殖に成功
- 1989 (平成1)年3月 横浜博覧会でイルカショー開催
- 2002 (平成14)年3月 新水族館建設のため海の動物園閉鎖
- 7月 世界初のバンドウイルカ4世誕生
- 2003 (平成15)年8月 マリナランドがフィナーレ
- 2004 (平成16)年1月 江の島水族館がフィナーレ
- 4月 新江ノ島水族館がオープン



— 江の島水族館が半世紀ぶりにリニューアルされ、今年四月、「新江ノ島水族館」として新たなスタートを切りました。順調な滑り出しですか。

堀 おかげさまで、初年度効果「ご祝儀入場」に支えられ、入場者数は平日で平均五千人、土・日・祝日は一万人。目標としている年間百八十八万人は達成できそうです。二年目からは当然「ご祝儀入場」は減りますから、ダウンは覚悟。十年後は八十万人と予想していますが、この範囲内なら十分営業として成り立つでしょう。

旧水族館は、義父で元日活社長の堀久作氏により、日本最初の近代的水族館として昭和二十九年に設立された。徐々に規模が拡大され、最終

的に魚類展示を中心とする水族館、イルカなどによるショーを公開するマリナランド、ペンギンなど海獣類を飼育展示する海の動物園の三施設を備えた水族館として、年間平均五十万人が訪れる湘南海岸の名所となった。老朽化したことなどから、開館五十周年記念事業として建設が進んでいた。

— 新江ノ島水族館としてのコンセプトは、どのようなものですか。

堀 「相模湾と太平洋」や「生物と環境」を基本テーマとしたエデュテインメント水族館を目指しています。エデュテインメントとは、エデュケーション(教育)とエンターテインメント(娯楽)を組み合わせた造語です。基本テーマについて学びながら、海や生命にひそむ不思議や驚き、感動などを味わってもらおうというものです。

たとえば、海水容量一千トンの「相模湾大水槽」では、八千匹のマイワシの大群が銀鱗を躍らせながら泳ぎます。そのほか、岩場から海底までに生息する大小の生物九十種二万匹を観察できます。女性ダイバーが魚にえさを与えながらその生態や特徴を解説するダイビングショーも行っていますが、えさに敏感に反応する魚の群れに驚きながら、海の学習ができるのは水族館なら

ではです。

長い歴史に裏付けされた飼育技術とトレーニング技術によるイルカとアシカの競演ショーは、同館でも最も娯楽性の高いもので、千人収容のスタジアムは毎回満席だ。併設の「なぎさ体験学習館」は、海の面積の10%以下しか占めていないにもかかわらず、海洋生物の過半数が生息しているなぎさの大切さを知り、学び、環境保護について考えようという施設。こうしたショーや学習館も、「エデュテインメント」の一環にはかならない。

水族館の役割の一つに水生生物の調査・研究があるといわれています。江の島水族館で続けられていたクラゲ飼育の成果を公開展示したところ、大変な人気だとか。

堀 クラゲに関しては三十年以上にわたる研究の歴史があり、常時十種類のクラゲを公開できる技術を持つに至りました。

透明感あるクラゲのかさが、ゆったり開いたり閉じたりしながら浮遊する様子を見るのは、岸辺に寄せるさざ波を聞くように、気持ちが安らぐのです。見ていて飽きません。いやし効果があるのです。驚きとか不思議体験のほか

に、水族館の魅力にいやしを加えるべきでしょう。新水族館の「クラゲファンタジーホール」は、全体を青で統一し、神秘的・幻想的な雰囲気を出しています。

新江ノ島水族館が目指すエデュテインメントは、来館者に対するもの。これとは別に水族館独自の役割として、クラゲだけでなく水生動物の生態に関する調査・研究や、希少生物の資源保護も求められている。同館でもウミガメの卵をふかさせた後、個体を江ノ島沖に放流したり、繁殖させた藤沢メダカを市内の小学校に配ったりしてきた。最近、絶滅の恐れのある中国のヨウスコウカワイルカ保護活動にも取り組んでいる。

動物と人間 示唆に富む「共生」

— 著書「水族館のはなし」(岩波新書)に、動物と人間が共に生活を分け合う仲間であるという「共生」の認識が浸透してきたのは喜ばしい、と書かれています。「共生」は、健康者と障害者の間にも通じる概念だと思えますが…。

堀 生物の中で、人間が連鎖の頂点に立っているとおぼえるのではなく、生

「生き物にはさまざまな生き方があり、それを理解することの重要性」を強調する堀館長。それは、人間の世界にも多種多様な生き方があることを認め合おうということにほかならない。

健康者と障害者の関係にあっても、障害のある人には健康者が手を差し伸べる。その上で、障害のある人もない人も、住みなれた地域で、互いに人格を尊重しあいながら、その人らしい心豊かな生活を送ることを認めよう。そんな環境を整えられたとき、健康者と障害者の「共生」が生まれたといえるのだらう。

自然界での人間のおごりを戒め、動物と人間の「共生」を求める堀館長の見解は、きわめて示唆に富む。

聞き手 大谷 義輝

(神奈川新聞厚生文化事業団・専務理事)